

一橋大学大学院言語社会研究科

科学研究費補助金・基盤研究(B) 研究セミナー

「生表象の動態構造——自伝、オートフィクション、ライフ・ヒストリー」

日本における《私語り》の変容

初代市川團十郎の
「願文」をめぐって

廣瀬千紗子 同志社女子大学表象文化学部

自叙伝・自画像・自讃歌
本居宣長の場合

田中康二 神戸大学大学院人文学研究科

「生表象」参与の前提
作文・日記・書簡

安田敏朗 一橋大学大学院言語社会研究科

コメンテーター 菊地 暁 京都大学人文科学研究所

日時 2010年9月23日(木・祝) 午後13時30分より

場所 一橋大学 国立・東キャンパス 国際研究館4階 大教室

(JR中央線「国立」駅下車 徒歩10分)

入場無料・事前予約不要

連絡先 森本淳生 (atsuo.morimoto@srv.cc.hit-u.ac.jp)

趣旨説明 13:30~13:40

初代市川團十郎の「願文」をめぐって 13:40~14:30

廣瀬千紗子

大正6年に、伊原青々園（1870~1941。演劇史家・劇評家）が堀越（市川）家所蔵文書の中から見つけた通称「願文」の願主は初代市川團十郎で、元禄3年（1690）に発願。自伝的記述を含み、芸の自負と処遇への不安を、きわめて率直に述べる。その謙虚にへりくだる姿勢は自負そのもので、神慮を仰ぎ、父母への孝養を誓い、一家の安泰を願って、ためらうところがない。いまだ家柄は確立せず、ひとりの人気役者にすぎない初代團十郎の願望を紹介する。

*参考文献 加賀佳子／武井ゼミナール「初代團十郎の願文—翻刻と解題」『演劇研究』第17号、早稲田大学演劇博物館、1993年3月。

自叙伝・自画像・自讃歌——本居宣長の場合 14:40~15:30

田中康二

本居宣長（1730~1801）は30有余年の歳月を費やして『古事記伝』を完成させたが、その一方で自らを語ることも少なくなかった。『家のむかし物語』（1798年7月）では祖先から語りはじめ、その末席に座を連ねる自分を語った。また、『遺言書』（1800年7月）では、死後における葬送の作法や奥津城の造り方まで、こと細かに指示を出した。つまり、自分の生前から死後までを統御しようとしたといえよう。このことに生前に二度描かれた自画像（44歳・61歳）・自讃歌を絡めて、宣長のアイデンティティを検討したい。

「生表象」 参与の前提——作文・日記・書簡 15:40~16:30

安田敏朗

日本語の「自伝」ということばは、近代になって登場する翻訳語であった。また『福翁自伝』を代表とするように出版・公開を前提とし、速記術の助けを借りながら、語りかけるような「言文一致」の実践のひとつでもあった（安田「自伝をめぐって」、『言語社会』第3号、2009年）。

福沢諭吉の場合は書くことに関してはきわめて特権的な立場にあったといえるが、書くことによってだれもが「生表象」の問題に参加できるようになるには、近代的教育のなかでの訓練が必要とされる。本報告では、作文教育における「児童をして思ふ事を言はしめ、又書かしむる」（上田万年「尋常小学の作文教授につきて」、1894年）ことのもつ意味を考えてみたい。それは必然的に文体の問題とも絡んでくるが、日記や書簡の近代へも目配りしつつ、できるだけ風呂敷を広げてみたい。

コメント、質疑応答 16:40~18:00